

凡愚姐御考

長谷川時雨

青空文庫

義理人情の美風といふものも歌舞伎芝居の二番目ものなどで見る親分子分の關係などでは、歪んだ——撓ためた窮屈なもので、無條件では好いものだといひかねる。立てなくつてもいい義理に、無理から無理を生ませてる。人情にしてもまことに低級卑俗だ。大局とか、大義とか、さういふものには眞つくらで、ただ、ただ親分のためとか、顔が立たぬとかでもちきつてゐる。しかも、その親分、いかさまでない實力と、金のはいるのは昔からぎやうてん 天の星のやうで、はなかはど 花川戸の長兵衛をはじめさうした人たちは、人間としても一人物であり條理もわかりさうだが、そのほか、野のざら晒しごすけ悟助のやうに、大概なのは氣がよければ金に缺けてゐる。男

伊達が起つてきてからの社會では金がなければ、中々道理もひつこむ世の中なのだから、勢ひ、講談などでできいても悪い親分が多い。斬きツつ、張はツつも、正義や弱いものを助けるためのはすくなくて、繩張りの勢力争ひで、弱者がほろびてゆく。

「文藝春秋」できかれた「姐御あねごぶり」といふものは、勢ひさうした見方からいつて、およそ、わたしのきらひなものだ。姐御とは、さうした輩ともがらの細君を敬稱したものかと思ふ。親分の顔のよしあしも、一つは、細君の子分操縦法——つまり臺所まかなひ、小遣ひ錢、仕着せの心附けなどの附け届けの氣の利きかたで、だいぶ違ふのだらうと思ふ。で、以前役者の女房にそれ者しやが必要だつたごとく、姐御てあいもなかなか、粹もあまいも噛みわけた苦勞人で

なければおさまらなかつただらうし、男まさりの氣強い女ものでなければ、無考へな、血の氣の多い、若い衆を操御し、ある折は親分とも夫婦喧嘩もしなければならなかつたであらうから、勢ひ、むかうつ氣の強い女でなければならぬ。鐵火てつくわにならざるを得ない。

ところで、鐵火とは、巻き舌で、齒ぎれのよい肌合を差していつたものだが、氣のあらい勇み肌いきはだのなかでも、鐵火といはれるのは、どうしたことかすこし下品さをふくんでゐる。鐵が火のやうに焼けて、カンカンなのか、火のやうに強い性格といふのか、それとも火のやうに焼けた鐵の棒を突きつけられても、おそれない人といふのか、そんなことは、さうした方面の研究をしてゐる人

にでもきかなければ由來はわからないが、坎かん、もしくは驛かんなるものならば、女の時にもつてくれば、疝かんの高い馬のやうな跳つかへりをさしたものともおもへる。「言ことばのいづみ泉」を見ると、戰國時代に罪の虚實を糺さんために、鐵を赤熱せしめて握らせるものがある。そしてまた、心ざま兇惡無慙なること、野鄙やひさつばつ殺伐ともある。鐵火肌はさうした性質ともある。

そこで、獨立した女親分——そんなふうなものをも姐御といひ、尊稱して大姐御となへるやうだが、わたしはこの位きらひなものはない。なぜなら、いやに偉らがつて、そこに、あざけきつたものが多分にあるからだ。

ともあれ、まづ、江戸末期の頽廢した、朝酒あさざけでもひつかぶつ

てゐられるやうな時期の、大姐御といふもののかたちを示してみると、黒じゆすの襟のかかつた廣袖ひろそでの綿入れ半纏、頭髮はいぼぢり巻きか、おたらひ、長羅宇の煙管をつけて長火鉢の前に立膝。白の濱ちりめんの湯まきに、藍辨慶のお召、黒の唐じゆすと茶博多のはらあはせのひっかけ帯——事實これが似合ふ女は、さうザラにあるものではない。甚ださつぱりしてゐるやうでゐて、おそろしく、人によつてなまめかしくなる。そこで素地きぢを洗ひ出す必要があつたのであらうが、當今の芝居で見るやうな、場違ひの、エロつぽいものも澤山あつたものと思へる。およそ、厭味なのが多かつたことであらう。

しかも、早のみこみで、勘かんぐりで、小才がある。かういふ女が

おつちよこちよいをけしかけたのだから、小喧嘩こいさかひは絶えない筈ではなからうか。ものの根こんぽん本をわきまへず、親分の顔——面つらがたたねえといふだけで、蝗いなご蝻のやうに跳ねあがる。今日でも、支那の古い方面では、何事も面態、めんずといふさうだ。面態めんずさへたてば、どうでもいいといふのは自分だけの立場がごまかせればよいといふのであらうが、面つらが立たねえと、昔の芝居の二番目ものなどで見得をきるのも、多くはそれに似通つてゐる。誠にせまい道徳——道徳といつてをかしければ、狭い自己満足だ。わたしはかういふ世界を好かない。その裏にある潔癖だけを——せまい正義感だけを買ひはするが、およそ、わたしの時代観とはかけ離れたものだ。

姉御とは本當は姉御前あねごぜの尊稱で、御ごとは敬し親したしんだ呼び名ゆゑ、母御前ははごぜとおなじに、よばれて嬉しい名でなければならぬのを、きやん（俠）な呼名に轉化してしまつて、あばずれといふふうになつてしまつてゐる。ごくよい意味にとる時に女丈夫といつたものも含んでゐるし、サラリとした氣風をも籠めて、あねご肌はだといふやうだが、事實はすこし異つてゐる。サラリとした氣風といふなかには、生れだちの氣風もあるし、修業によつて超然たる悟りもあるし、ガラツパチの粗雑なものとは、てんから質においてちがつてゐることは、女丈夫をもその中に入れるやうだが、女丈夫は讀んで字のごとくますますをの魂がある女なのだ。

もとより仁侠の、親分にしても姐御にしても、白刃しらばの中をもお

それぬ氣魄きはくと正義觀せいぎくわんのあつた者を、當初はじめは立ててきたのであらうが、總稱して、姐御とは親分のおかみさんをさすことになり、それに似たつくりのあばずれ女などを多くさしていつたものとなつたのだ。丈ますらをだましひ夫は魂はは、男の所有のものばかりだと思つてもらつてはちつと困る。男にだつて持ちあはせぬものの方が多い。だからこそ、わざわざますらをといふ言葉が立派さうにあるので、女にもますらををだましひの所有者は澤山たくさんにある。ごく大昔のことはいはなくつても、近代にも、武家の妻にも町人の妻にも娘にも、業わざに徹した尼さんなどにも實まことに多くある。女として外見からいかついのは、眞まことのますらをを魂だましひの所有者ではない。

で、よく人の面倒を見るやうだから姐御だといふならば、それ

は甚だ非理で、そこに心から迸ほとばしるやはらぎと、人入れ稼業をか
 ねた、傍の迷惑をかへりみぬもの好きとの區別がなければならな
 い。いはゆる女親分、姐御はそれが商しやうばい業で、勢力をつくるた
 めにさうするのだ。だから、性分はケチンボでもきればなれのよ
 い顔をする。顔にかかはるからだ。無理な具面くめんも自分が可愛いか
 らで、自分の口の問題だからだ。それを、些か、似るところがあ
 るからとて、維新の女傑野村望東尼や、明治の愛國婦人會設立者
 奥村五百子を、そのものたちとならべる愚は、誰もしないであら
 う。

私のいふ意味の、女親分、姐御の起つたはじめは——もとより
 それより前にも似た職しよくぶん分はあつたであらうが——男伊達をとこだて、

奴やつこと立だてから來てゐる。旗はたもと本と奴やつこ、町まち奴やつこからの傳來の男立

だが、幕末の侠客は博奕渡世になり、男を立てるたてないも、さうした繩張りの争ひが主のやうだつた。もともと奴やつこといふ名からして、大昔からいやし貶められ、罵しられた卑稱で、あやつ、こやつ、やつ、やつこ、家いんの子、家やツ子だといふことだ。奴は奴どれい隷で、女は奴婢ぬひであり、庶民より一階級下の賤民とされてゐた。江戸時代でさへ重罪人の妻子や、妹など、または關所破りの女たちなどは、本籍を剥がれ、無籍者、女をんな奴やつことして吉原へ無期限でおとされたといふ、奴とはいまはしい名なのだ。大昔の貴族は奴を多くもつてゐた。徳川期に江戸の武家の奉公人で、主人の供をしてあるく奴が、主人の伊達好みから、派手はでなふうをするやうになり、奴

の腕つぶしの強いのを自慢にし、奴も仁侠の氣を帯び、かまひげ鎌髭、

撥鬢はちびんの風俗で供先へ立つたので、その颯爽たる氣風が、當時創

業期の江戸に集つた負けぬ氣の諸國人の好みに合つて、斷然その

風體ふうていが流行し、その仁侠——男を磨くといつた下に、漸く太平

になつて、上は大名に、下は金持町人にはさまれて、世の中が鬱う

陶つとうしくなつてきた、血の氣のしづまりきらない三河系統の旗本

の一脈が、旗本奴と名乗れば、その横暴我儘を通させまいとして、

市民側からは町奴が出来た。それが顔役の先祖で、顔役とは、喧

嘩口論のをり、取鎮めたり、事件を審いたりするうち、だんだん

顔馴染になつて人氣にんき肩入れかたいが出来、その人がゆけば、すぐに落着

するやうになつたので、顔をもつてゆくとか、顔をかしてくれと

かいふのがもとなのであらう。こんなことは、私よりよく知つてゐさうな讀者の多い本誌へ書くといふのは誠に氣がさすが、順序なのでよぎない。

そこで、盛り場の女などがやつこふう奴風かたぎをするやうになり、奴氣質かたぎを賣りものにしたが、それはきやん侠で、パリくとした、いい氣つぶ、ものに拘はらない、金に轉ばないといふたてまへで江戸藝者など、それをまづ第一の素質とした。これは夕立をこのみ、櫻花の散りぎはを賞美する、いさぎよさを好む、日本人的代表な、さつぱりした氣質なのだが、それつきりでは困りもので、江戸ツ子はさつき臯月の鯉の吹き流しなどと、得意になつてゐた一部もあるが、サラリとしたそのうらに、噛みしめた細かいキメはもつてゐる。それは、

都會人特有のセンチメンタルだとばかりもいへない。しかし、それはよい方のことばかりだったので、奴氣質とはなにかと、字典を開くと、放埒、無頼の氣質、折助根性をりすけこんじょうとある。奴詞やつことばは一種粗雑な言葉づかひ、六方ろつぱうことば、關東くわんとう東べい、とある。

徳川九代家重の寛延元年七月廿七日の禁令には（百八十八年前）
 おつて供　　り徒士の者、中ちゆうげん間、奴共風俗よろしからず不よろしからず宜よろしからずがさつに
 有之、供先にてても口論仕不届に候自今風俗相改かうとふと致し、
 相愼つゝしめ

とある。同年八月十日にもまた、

惣すべて供　　り徒かち士の者共風俗がさつに候、中間共も異風とりこに取とりこ
 拵しらへ候者共多相見え別わけてがさつに有之候。

奴共別てかさ高にて候間供先にも口論等致又者悪言等申者之有候はば急度お仕置申付にて可有之候。

とあり、同日の觸れには

近年町人異風に取り拵候風俗の者多く就中かみなど髮拵を異形に結成し共外異體の族有ともがら之候間、召仕等迄急度申付風俗かうとふに致萬事がさつに無之様可致候。

とある。

奴と名乗つた男女の侠客に、元げんろく祿の奴の小萬と、後のちに奴の治兵衛といふのがある。小萬は大阪長堀に生れ、木津家といふ豪家の娘だつたといふ。ゆきといふのが本名かどうか、後に三好氏が祖先だからとて、三好ゆきとなり、剃髮して正慶尼となつたが、

美人で俠氣があり、才藻ゆたかに學問もあつて、しかも金持ちの娘で腕が立つといふのだから、おあつらへむきでもあり、また驕慢でもあつたらう。つきまとふ男がうるさいといつて、顔に墨をなすつて痣をこしらへ、しかも妙齡十六の時、天王寺詣りの歸りに蛇坂へびざかで四人組の悪者が、ただの娘だと思ひ、引つ浚はうとしたのを、覺えの早業でとりひぢき恐れ入らせたので、奴の小萬の名は風のやうに廣まつた。

二十の春、京へ上り、禁中に仕へ、ながつぼね長局が祐筆をして五年をおくつたが、また大阪へ歸つた。奴風俗伊達な刀の一本ざし、ある時には豊臣秀頼の追善にと、にはか雨にぬれる男女に傘百本を寄附したりしたといふが、柳里りうりけふやなぎさはきゑん恭柳澤淇園かよが通つたとも、

堂上家だうじやうけの浪人を男妾にしてゐたが、その男が義に違ふことをしたので放逐し、その後は男を近づけなかつたともいはれてゐる。この小萬などが、まあ、つぶだつた女親分とか、姐御などの先人であらう。

姐御——阿嫂あさうのほんもとは、なんとなく支那にありさうだが、

支那のものを讀んでゐないから分らない。水滸傳など、ああした作りものとしても、あの虎を張り殺した武松ぶしやうにしびれ酒をのま

せ、母夜叉ぼやしや孫二娘そんじじやう——孟洲みちうの路の、大樹林の十字波の酒店で、

頭には鐵環をはめ、鬢には野花をさした美しい女が、人肉の肉包を賣つてゐたり、これも登洲城の東門の外で、酒を商つてゐた、

母大虫ぼだいちゆう顧大嫂こたいさうといふ勇力武藝男子にすぐれ、四五十個の男も敵

とするあたはずといふ女をんな猛者まもしやは、おなじ、梁山伯りやうざんぱくの女性のうちでも、扈家莊こやそうの女將で、五百の手勢を率ゐ、白馬にまたがつて兩刃をつかつた、お姫様出の、美女一丈青いちぢやうせいこさんじやう扈三嬢こさんじやうなどよりは、姐御といふことばのはまつた器であると思ふ。ああした粉ふんぼん本は、あの頃ばかりではなく、支那には澤山あつたのかも知れない。シベリヤお菊とか、おらんだお蝶とか、海外漂泊の女の中にも、さうした方面の人たちは、我國の實在の女性にも多かつたであらうが――

それにしても、姐御とはどうしても、浮世ずれのしたところと、世帯ずれもあつて、いはゆる、下腹したはらに毛のないといつた、したたかものの人柄をも加味し、轉じては、當今でいへば野心家、か

なり金銭慾も名譽慾も覇氣もあつて、より多く政治的でなければあてはまらない。

×

だが、わたしがさういふと、あなたはその血をひいてゐるところがある。江戸ツ子の末だからといはれる。それは意味ありげで、意味のない言葉だ。江戸ツ子がガサツだといふのならうけとれるが、江戸には士、工、商の三階級があつて江戸といふ都會をつくつてゐた。その尤もガサツな職人風しよくにんふうなものいひが、どうも江戸ツ子といふ概念をあたへてゐるので、すべての好みが淺薄せんぱくに感じられると見える。だが江戸ツ子の負まけじ魂たましひは、全國的のものを代表してゐる。といふのは、もとより、全國的代表移民の都會で

あるから、そのころの負けじ魂が、利かぬ氣のきつぷになつて残つてゐるので、すべてが鉋かんなくづツ屑のやうなものばかりではない。もすこしいつて見れば、それどころかあんまり頭が早くつて、冴えて冷たくさへなつてゐたのだ。で、無論、眞の江戸氣質などは、滅ほろびたのだ。残骸はなにでも厭なもので、わたくしなどもその厭な残骸から脱却して、新日本の一民として生きたいのだ。

當今といへども、姐御がりたいものがないとはいへない。黨を組んでためにしようとするもの、自分の實力以上の力としようとするもの、或は皆無でないかもしれない。だが賢明なる周圍が、そんな時代錯誤をさせはしない。集團的の強さはみんなよく知つてゐるが集團は、個々の集りで、親分子分の關係でないから、自

由であり、快活であり、卑屈でない。

およそまあ、姐御なるものを想像してごらん下さい。心の肌のキメの粗いものだ。神経は馬の尻つぼの毛を繕よりあはせたほど太く、強靱でなければならぬ。まして顔の皮は、昔でさへ千枚ばかりといったが、防弾ハガネほどでなければならぬ。

わたしなども、大姐御と書かれることもあるが、愛あいきやう敬やうなのはわかつてゐる。愛あいしやう稱しやうしてもらつてゐるのであつて、今の世

の、ほんとの大姐御などといふものになれる資格があれば、それは、昔時の叡山の悪僧よりもたいした代ものだ。わたしはただ、害のない存在として、若い女友だちから愛されてゐる幸福者にすぎない。わたしには姐御などになれる荒つぽい勇氣がない。そん

な風におもはれるのさへ恥かしい。

（「文藝春秋」昭和十一年二月號）

青空文庫情報

底本：「桃」中央公論社

1939（昭和14）年2月10日発行

初出：「文藝春秋 昭和十一年二月號」

1936（昭和11）年2月

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2008年12月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

凡愚姐御考

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>